

二〇一六年、明けましてお目出度うございます

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。去年今年と昨日今日、晴れやかな門出とそうでない平々凡々、とはどこが違うのか。同じ一日であるはずなのに――」

その違いとは一方が少なくとも年単位なのに他方はその日限りであること、いや、一方が人生をみ通しているのに他方はその欠片さえ持ち合わせないこと、ではないのか――
そして、もっともっと大きな違いは、自分だけの孤独な世界と

「人みな神の子、互いに兄弟」

との共なる世界であること、とはいえ、違いが判ったとしても、人力で不可能なことは最初から諦めた方が理性的との見方もある――

ただし、その選択にこそ、希望と絶望、生命と死、平和と殺戮との隔絶がかかっている。容易にできないことであるからこそ、平和を目指す厳粛な時がある。

こころしよう―― 絶滅収容所の囚われの身にあつてさえ

「それでも人生にイエスと言う Trogen dem ja zum Leben sagen」と叫んだ先人がいた。
これこそ神からの招き――

「心の貧しい人々は幸いである、天の国はその人たちのものである。
平和を実現する人々は幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」（マタイ第五章）
がこたえます。

二〇一六年の門出を寿ぎつつ、

西山俊彦